

日本三大開拓地・川南合衆国

クワ一本で不毛の原野に挑んだ。 開拓者は全国津々浦々から。

川南町民の出身地をたどつたらキリがない。どこから何人かは分からないが、全国津々浦々、すべての県人がいる。「合衆国」と呼ばれるゆえんだらう。

開拓の歴史は藩政時代から始まった。明治の頃は四国からの入植者が多く、大正、昭和と戦前まで続き、この頃までは主に岡山、山口など中国地方と香川、愛媛、高知など四国地方からが目立った。

しかし、押し寄せたのは何といても戦後間もない頃。三千八・七三ヘクタールにも及ぶ、国策の入植事業が始まったからだ。青森県十和田市と福島県矢吹町と並び、「日本三大開拓地」と呼ばれるのも、そんな大規模な国営開墾だったため。

川南町ではこの二市町との交流を平成十四年から活発に進めている。昭和十五年には約一万人だった川南村の人口も、川南町になった昭和三十年には二万余人を超えるまでになった。

川南に展開していた落下傘部隊や戦車隊、陸軍・菊池兵団などの解散とともに開拓地区に入った元隊員、満州など外地からの引き揚げ者、南郷村や北川村、北方村など県内から分村的に移住してきた入植者、食料難を生き抜くために故郷を捨ててきた一家の次男、三男など、それぞれ元の職業は単人もいれば教師やサラリーマン、農家などさまざま。不毛といわれた原野にクワ一本で挑むには、あまりにも素人が多く、度胸

と無謀が同居する開墾が始まった。住まいは自分で雨露をしのげる程度の簡単なものを造るか、旧兵舎一棟に十数家族が暮らすという、やはり風雨に苦しみながらの生活だった。

「ウチは七人家族、風が吹き抜ける兵舎に住みながら、父を手伝って家を造るのに約半年、材料は風倒木や兵舎の古材、飛行場の倒れた格納庫など、こんな貴重な材料はアツという間になくなりましたよ。大変だったのは井戸掘り。シュロでロープを作り、木で滑車を、手掘りで十五メートルくらいかな。いまま大事に使っています。とにかくみんなコマツタ、コマツタだけ、解決方法は知恵と人力だけでした」（水穂地区に

住む南郷村出身の入植者）

「家は掘って立て小屋を自分で作り、開墾はひとクワ、ひとクワ……、明るくなったらクワとノコギリで土地を開いていく。時には月明りで仕事も……。つらいと思つたことは一度もないな。開けば自分の土地ができてくる。なにせ独り身だし、山には食い物は何だってありましたから。オカボを植え、ナタネ、ムギ、そしてカンショ……。こんな暮らしが十年は続きましたか（赤石地区に住む長野県出身の入植者）

軍から牛か馬を譲り受けた元隊員の開拓者も結構いたが、多かれ少なかれ、開拓者のほとんどは裸一貫から。まるで映画でも観るように、どの開拓者にも超大作といえるドラマがあった。そこには踏みとどまった者もいれば、離農者

も相次いだ。昭和二十五年の入植状況は、純入植者約四千四百人、地元増反者約四千二人だった。

とにかく、食べられるものは何でも植え、まさしく「百姓百



●昭和40年の川南町役場庁舎



品農業」。この怖い物知らずの進取の気性は、開拓が始まった頃からの川南の最大の特徴だらう。昭和初期には県下一の桑畑を作り失敗、二十年代後半は澱粉工場が林立し、カンショ作りが地場産業の主役へ、しかし三十年代に入り徐々に廃れていく。三十六年に果樹振興法ができた時はこそってミカン栽培に走った。いち早く「みかん王国」を築き上げたが、大寒波や大暴落が襲い、四十年代後半からしだいに崩れていった。ハツカやユーカリの産地化をめざした時期もあったが、ことごとく当てが外れている。しかし、憶せず新しいものに手を出し、土地に合ったものを探し出そうとする精神は、今日の川南の土台を徐々に築いていった最大のチカラともいえる。

町制が始まった二十八年頃にはようやく戦後の混乱も落ち着きを見せ始め、悲願だった川南漁港の整備や青鹿ダムの建設が



●青鹿ダムの建設

始まっている。教育委員会が設置され、川南商工会が発足したのもこの頃。三十三年には「村おこし協議会」もできている。三十年代は岩戸景気にも支えられ、全体的には川南の産業は順調に伸びた。ようやく生活にも目が向き始めた頃といっていだらう。



●昭和24年 天皇家下御巡幸記念（唐瀬原開拓地）